

人口300人の島の「教育による島づくり」 ～「自立した当事者」による一体感のある島づくり～

はじめに

時折、「島の教育は遅れている」「どうせ島には～～がない。だからダメだ」と言われることがあります。離島の教育に関わる当事者として、また利島の島民・役場職員として、そのようなことを言われる度・聞く度に悔しい気持ちになります。なんとかして見返したいとも思います。一方で、このようにも思います。「本当にそうなのか？むしろ捉え方が偏っているのではないか」と。実際、昭和時代に「恵まれない地域」と評されることの多かった「へき地・小規模校教育」の価値について、令和答申で強調されている「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」や「自立した学習者の育成」の観点からは、むしろ絶好の環境であると、ポジティブな面が捉え直されはじめています。

派手さはありませんが、利島が持つ「強み」を最大限生かしながら進める小離島の挑戦の現在地をご紹介します。

1. 不思議な島「利島」

東京都利島村（としまむら）は、伊豆諸島北部に位置する人口約300人、児童生徒数約30人の一島一



村の小離島です。日本で3番目に人口が少ない自治体である利島は、他の離島と比較しても珍しい環境と言えます。例えば、以下の点は一風変わっています。

【島の特徴】

- 島民の20代～40代のうち約8割が移住者で構成されている。
- 選挙の投票率は95%に迫る。
- 子守り役の年長の子供を選ぶ「ボイ」という仕組みがある。
- 20万本とも言われる藪椿に覆われる島で、椿油の生産量は例年日本一を争う。
- 島内全世帯にタブレットを配布し、デジタル化に注力している。

【教育面の特徴】

- 教職員は約25名で、島民の成人人口のうち約1割を占めている。
- 運動会には人口の約7割が参加する。
- 東京都立高校の入試問題はヘリコプターで輸送され、島内で受験できる。
- 村営プールには海水が入っている。

東京（内地：ないち、と言います）から距離として南に約130キロ、高速船であれば2.5時間で到着でき、「近くて遠い秘境」と評されることもあります。

そのためか、昔ながらの「島らしさ」と令和の「新しさ」が共存している空間です。

2. 「15の春」が特徴

利島村（としまむら）には島内に高校が無く、義務教

育段階の児童生徒約 30 名が、1つの校舎で学んでいます。中学卒業と同時に子供たちは親元を離れ、島外の高校に進学する「15の春」が特徴です。

そのため、①義務教育段階の「今」、②大人になった後に彼ら・彼女たちが生きる「未来」の視点に加え、③高校進学後という「少し先」の3点をバランスよく考慮した教育実践が必要になります。そうした中で、学校教育目標として「自立」を据え、「利島ならではの」教育活動を行っています。

教育面の環境は、とても恵まれています。例えば「極」がつくほどの少人数学級（1学年は現在、2～5名）、「島全体が教材」とも言える豊かな自然・伝統、「道で会う人は、ほぼ顔見知り」の濃密な地域コミュニティなどです。地域とのつながりの深さが影響してか、アンケートでは、ほぼ全ての児童生徒が「利島を好き・どちらかという好き」と答え、7割程度が「利島の役に立つことをしたい」と回答しています。

一方、高校進学後は、島に残る保護者と内地で暮らす子供の「二重生活」により、保護者の家計負担の大きさが課題です。そのため、就学前段階、義務教育段階、高校進学後のそれぞれについて大胆な負担軽減策を行っています。例えば義務教育段階では、学校給食費や教材費のみならず、学童費や部活動遠征費、修学旅行費、海外短期ホームステイ費用などが無償であり、高校進学後は離島高校生修学支援制度による月額4万円の給付や、村独自の奨学金制度（Uターンした場合には居住年数に応じて返済が免除になる仕組み）による月額5万円の貸与を行っています。

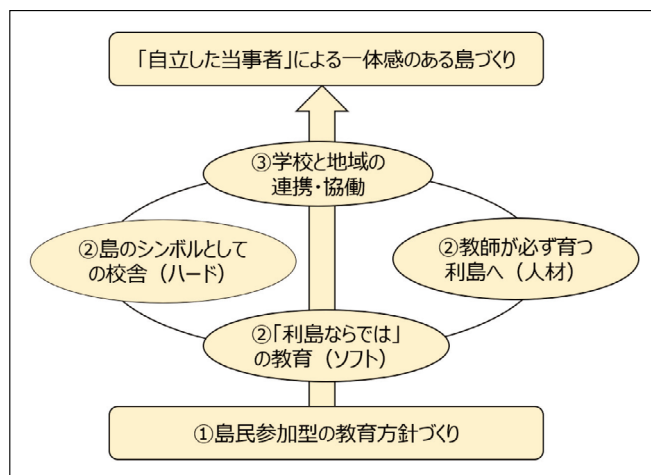
3. 学校づくりと村づくりの相互関係

「良い学校が良い村をつくり、良い村が良い学校をつくる」と言われるように、学校づくりと村づくりは相互関係にあります。実際、船から利島港に着くと、学校が村のど真ん中に見え、文字通り「地域の核としての学校」です。



利島村で様々な取組を進める際、①人口 300 人だからこそ、取組に島民の意見が反映されやすい、②規模が小さいからこそ、機動的な改革が可能である、③移住者が多い島だからこそ、島民の価値観が多様であるといった特徴があります。

こうした特徴を考慮しつつ、利島村では、①島民参加型の教育方針づくりを行いながら、②学校教育のソフト・ハード・人材のそれぞれの面で具体的な取組を進めています。また、③学校と地域の連携・協働を重視しています。



4. 島民参加型の教育方針づくり

利島村では現在、島民参加型の教育方針づくりを進めています。教育について議論する際、理念を議論すると「抽象的で総花的」になり、具体を議論すると「目指す理念が曖昧」になる傾向があります。

そのため、「理念も具体も」議論することが重要だと

考え、①教育大綱の改定と②15の春自立シートの作成を同時並行で実施しています。

(1) 新しい教育大綱について

人口300人の利島村では、一部の人だけが頑張り、多くの人「他人事」であれば、生活を支えるサービスの維持さえ困難です。また小規模だからこそ、島全体の一体感の醸成が必要不可欠です。高校が無いという特徴(15の春に向けた「自立」と合わせ、新しい教育大綱では、「当事者」「自立」「一体感」の3本柱を据え、目指すべき人物像を「利島を良くする自燃性の人」としています。若い村長を中心に、「村長と話そう会」を複数回実施するとともに、意見募集を踏まえた修正版をもう一度提示するなどの「一歩踏み込んだパブリックコメント」を実施しています。また、シンプルかつ伝わりやすいものとするため、1枚で整理するとともに、【評論家ではなく当事者として】【憶測ではなく対話を】など、分かりやすい表現を活用しています。教育大綱は、令和6年1月中には完成版を公表予定です。



(2) 15の春自立シート

保護者から「利島では『自立』とよく言うが、何ができたら自立なのか」という声があったことを契機に、義務教育段階修了時まで、利島の子供たちが身に付けるべき資質・能力について整理を行い、その育成のために児童生徒自身や教職員、保護者が活用できるような「15の春自立シート」を作成しています。具体的な資質・能力として、例えば「自分にあった学び方を知っていて、その学び方が身についている」、「自分一人じゃないということを理解し、命を大切にすることを意識し続けている」、「ふるさと利島の良さと課題を自分なりに語ることができる」等を挙げています。これは、教職員



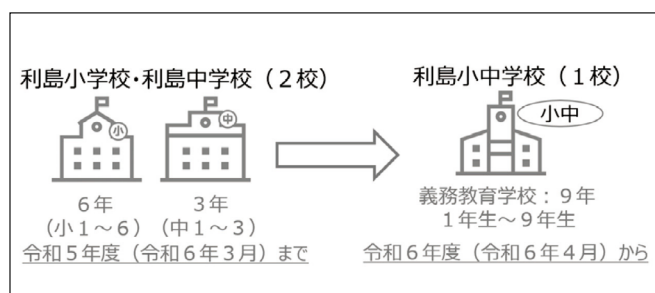
「15の春自立シート」(1.0版)			
No	分類	自立項目	頑張るところ
1	学びに向かう力・人間性等	✓ やるべきことの順番をつけて、一人でコツコツと勉強に向かうことができる	学校> 家庭> 地域
2	学びに向かう力・人間性等	✓ 自分にあった学び方を知っていて、その学び方が身についている	学校> 家庭> 地域
3	学びに向かう力・人間性等	✓ 学ぶことが楽しいと思っている、自分で決めることの楽しさ・大切さを知っている	学校> 家庭> 地域
4	学びに向かう力・人間性等	✓ 自分自身の良いところ、強みについて自信を持っている	学校=家庭> 地域
5	学びに向かう力・人間性等	✓ 失敗したことを落ち込み前向きに捉え、次に生かすことができる	学校> 家庭> 地域
6	学ぶに向かう力・人間性等	✓ 毎朝、一人で起きることができる、規則正しい生活ができる	家庭> 学校= 地域
7	学ぶに向かう力・人間性等	✓ こぞという時に、頑張ることができる責任感を持っている	学校= 家庭> 地域
8	学ぶに向かう力・人間性等	✓ 時間や約束を守ることができる	家庭> 学校> 地域
9	学びに向かう力・人間性等	✓ 自分が大切にされてきたことを知っており、日々の「当たり前」に感謝し、自分も周りを大切にできる	家庭> 学校> 地域
10	学びに向かう力・人間性等	✓ 少なくとも自分がされて嫌なことは人にせず、自分してもらって嬉しいことを人にできる	家庭> 学校> 地域
11	思考力・判断力・表現力	✓ 自分から挨拶できる	地域> 家庭= 学校
12	思考力・判断力・表現力	✓ 自分から知らない他者に話しかけて、コミュニケーションできる	地域> 家庭= 学校
13	思考力・判断力・表現力	✓ たくさんの人の前でも自己紹介できる等、自分のことを説明できる	学校> 家庭= 地域
14	思考力・判断力・表現力	✓ ふるさと利島の良さと課題を自分なりに話すことができる	学校= 地域> 家庭
15	思考力・判断力・表現力	✓ 生活のお金と遊ぶお金を分けるなど、自分でお金の管理ができる	家庭> 学校> 地域
16	思考力・判断力・表現力	✓ SNSの良さとリスクを理解し、使いこなすことができる	家庭> 学校> 地域
17	思考力・判断力・表現力	✓ 意見が違ふ人の良いところを見つけ、話をよく聞くことができ、同じく話しすることもできる	学校> 家庭> 地域
18	思考力・判断力・表現力	✓ 簡単に人や情報を信じ込まずに、嘘か本当かを見極めることができる。	学校> 家庭> 地域
19	思考力・判断力・表現力	✓ 困ったときに、その内容を正確に伝え、助けを求めることができる	学校= 家庭> 地域
20	思考力・判断力・表現力	✓ 「人の好き嫌い」と「考え方の違い」を分けて考えることができる。	学校= 家庭> 地域
21	思考力・判断力・表現力	✓ 自分は一人じゃないということを理解し、命を大切にすることを意識し続けている	家庭= 学校= 地域
22	思考力・判断力・表現力	✓ 自分の周りや地域を良くするために、考えて行動できる	家庭= 学校= 地域
23	知識・技能	✓ 読み・書き・計算など、社会で当然求められることを、行うことができる	学校> 家庭> 地域
24	知識・技能	✓ 分からないことが出てきた時は、インターネットや本などを使い、自分で情報を集めて整理ができる	学校> 家庭> 地域
25	知識・技能	✓ 自分自身のストレスの発散法について知っている	学校= 家庭> 地域
26	知識・技能	✓ 自分と異なる色々な特徴を持つ人がいることを知っている	学校> 家庭= 地域
27	知識・技能	✓ 正しい性の知識や犯罪・防犯に関する意識を持っている	学校= 家庭> 地域
28	知識・技能	✓ 自分が健康であるために、自分の食事を作ることができたり、洗濯、部屋の整理整頓ができる	家庭> 学校> 地域

や保護者等を対象としたワークショップを行いながら策定したもので、機動的に改定しながら、学校・家庭・地域の「共通言語」としての活用を進めていきます。

5. ソフト・ハード・人材改革を一気に

GIGA スクール構想の実現のために「ソフト・ハード・人材」の一体改革の必要性が叫ばれたように、学校教育改革のためには、同時並行で様々な取組に着手していく必要があります。

ソフト面の改革として、来年度から、義務教育学校への移行を行います。小学校・中学校で校舎1つ、職員室も1つという環境を生かし、利島の教育の強みである小中一貫教育を更に進め、利島ならではの学び・子供主体の学びの実現につなげていきます。



ハード面の取組として、今年度、文部科学省の「新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業」のモデル地域として、学校施設の基本計画づくりに取り組んでいます。利島村で校舎づくりを検討する際、海風により校舎が老朽化しやすいこと、坂道の多い地形により平坦な土地が少ないこと等の制約があります。その制約を補いながら新しい時代の学びを実現する校舎をつくるため、島民参加型ワークショップにより利島における学校の役割を整理するとともに、周辺施設を有効活用した「選択と集中」や「機能的複合化」について検討を進めているところです。

そして人材面の取組として、「教師が育つ利島」の実現を目指しています。利島出身の教職員は令和5年度時点で0名であり、東京都採用の教職員が3年を基本サイクルとする人事異動により赴任します。「利島に来た

い教職員の確保」と「利島の教職員の育成」の好循環をつくる必要があります。具体的な取組と情報発信の両面を強化しています。

「教師が育つ利島」の実現のため、今年度、文部科学省の「教員研修の高度化に資するモデル開発事業」の採択地域として、「小離島における教育委員会と学校の協働によるアクションリサーチ」の取組を進めています。その中で、教師が持つ「願い」や「思い」に着目した実践研究、教育DXに関する資格取得 (Google認定教育者資格) や非認知能力の測定 (Ai GROW) 等の新しい取組を実施しています。

例えば、「島に来たら子供理解が格段に深まった」「教材研究が進み、子供主体の授業ができるようになった」「ICT が使いこなせるようになった」「英語が話せるようになって小学校英語の自信がついた」など、利島赴任により、教職生涯を通して活用できる力をつけられるような環境整備を目指しています。

6. 地域の力をフル活用して

人々が幸せに暮らせるような小規模コミュニティには、安心できる「居場所」と活躍できる「舞台」が必要との指摘があります。島民300人の、それぞれの個々の強みを最大限生かすことで、地域の課題を解決し、地域を盛り上げることが可能です。以下2つ紹介します。

(1) 島民による受験生応援塾

移住者が多い島であり、保護者・地域住民の価値観も多様化しています。その中で「島には塾が無い」との声があり、保護者自身が有志の島民を講師として集めたボランティア塾がスタートしています。月曜は理科、火曜は社会、水曜は英語、金曜は数学と、日替わりで様々な職種の島民が参画して運営されています。

(2) 学校行事・地域行事の改革

良い小規模コミュニティには、核となる学校行事や地域行事があると言われます。一方、新型コロナウイルス

ス感染症等により、行事は数年間中止され、村の一体感もなくなってきているとの声もあります。そうした背景から、新しい形の行事の運営方法を試行しています。具体的には、これまで「大運動会」として実施されていた行事の半分を、有志による実行委員会が運営する形に変更することで、教職員の働き方改革と地域コミュニティ活性化の両立を目指しています。

令和5年度の運動会は、人口の約7割200名程度が参加し、教育大綱の柱の1つである、「一体感のある島づくり」の芽が出つつあります。

今後は、島民提案型の発案を支援する仕組みの創設など、生涯学習・社会教育の充実にも更に注力し、教育大綱の柱「当事者」「自立」「一体感」の実現に向けた取組を加速させていきます。

を図ることが可能になります。

「言うは易し行うは難し」ですが、教育委員会自身が、悩みながら実践をしていく姿を見せていき、人口300人だからこそできる「教育による島づくり」を行ってまいります。

(利島村教育委員会ホームページ)

<https://www.toshimamura.org/life/education/education-board.html>



おわりに

「人づくり」は「島づくり」であり、離島の将来は、それを担う人次第で左右されるものだと考えます。「どうせ離島だから」と後ろ向きに捉えてあきらめて立ち止まるか、「離島だからこそ」と前向きに捉えて意志を持って進むかは、まさに人次第です。

そのうえで、我々、離島の教育関係者が乗り越えるべきことがいくつかあるように感じています。1つ目は「意識的に前向きでいること」です。生活の微々たる不便さなどを嘆くのではなく、誰に何を言われようと、意識的に「島の教育の強み」に目を向け続けることが必要です。

2つ目は「評論家ではなく当事者でいること」です。小規模コミュニティの中では、外から意見のみを言うことや内部にしながら「コメント」に終始することに大した価値はなく、当事者として悩みながら泥臭く「まずはやってみる」ことが何より重要な貢献であると考えます。

3つ目は、積極的に外に発信し、外との比較に晒される機会を作ることです。新しい取組も知らなければもったいないですし、「井の中の蛙」もしくは「裸の王様」になっている場合は、外と比較することにより軌道修正